

1980年代後半期フィリピン、イフガオ調査についての内省的研究
バナウェ町とハパオ村、その政治家たちを中心に

熊 野 建

Reflexive Study on Fieldwork among the Ifugao Peoples
on Northern Luzon during the Latter Half of 1980s:
Focused on Local Politicians in Banawe and Hapao

Takeshi KUMANO

Abstract

This is a descriptive study for later analysis of field work based on the author's personal experiences at Banawe, a tourist town, and Hapao, a comparatively traditional village, both in Ifugao province, during the latter half of the 1980s, in which time some external political forces; the Philippine as a nation state and former American colonial administration, counter movements such as the New Peoples Army and so on.

Three local politicians will be half-biographically depicted and analyzed; the first two of them were the third generation offspring of American colonists. The last was a genuine Ifugao, who married out and succeeded in pioneering a business – a workshop of Ifugao arts in Baguio. and returned home to Banawe as a politician, however, plagued by political successes and failures.

The main purpose of this article is to document some historical facts from author's direct experiences, since the Ifugao friends orate and memorize some events, enjoy gossips, but never write down daily. In my opinion, one of anthropological studies' merits should be recording modern history at a given research site.

I owe so much to my Ifugao friends and the indigenous peoples for cooperation, a methodologically historical study on American-Ifugao relations that was applied with a simple anthropological technique by Jenista (1987), and theoretically reflexive anthropology on fieldwork by P. Rabinow (1980).

Key words: Ifugao people, local politicians, American offspring, anthropological research and fieldwork.

抄 録

本稿は、1980年代後半フィリピン、イフガオ州の観光町バナウェとハパオ村において直接体験にもとづく、筆者なりのフィールドワークに関する、将来、分析する意図をもった記述的研究である。これらの社会は外部的な政治勢力、例えば国民国家としてのフィリピン、アメリカ人による植民地行政、その反動としての新人民軍などに影響をうけている。

主に3人の地元政治家について半ば伝記的に描き分析する。そのうち最初の2人はアメリカ人植民者の第3世代の子孫にあたり、最後の政治家は純然としたイフガオでありながら、バギオに出て結婚しイフガオの伝統的な美術品をあつかうワークショップで商業的に成功したものの、政治家となって帰郷し、その後は政治的な浮沈を繰り返した。

本稿で主要な目的は筆者の直接体験から歴史的な事実を記録することである。というのもイフガオの人々は幾つかの出来事について口頭で語り記憶し、あるいは噂に興じるものの、彼らに何が起ったのかを記録

しないからである。私見では人類学的研究の長所の1つは所与の調査地で現代史を紡ぐことにある。

筆者がイフガオの友人たちの協力を負うところは大きく、また方法論的にはジェニスタ（1987年）による平易な人類学的方法を応用したアメリカイフガオの関係に関する歴史研究にも、また理論的にはラビノウ（1980年）によるフィールドワークについての内省的人類学に負っている。

キーワード：イフガオ、地元政治家、アメリカ人子孫、人類学調査とフィールドワーク

はじめに

2000年以来、特に民族スポーツを意識してルソン島のイフガオに伝わる農耕歴と密接に関わる行事を、遊びとともに述べてきた経緯がある。この行事は今になって思えば予想すべきであったが、アメリカ人植民地行政と密接にかかわっていた。しかしながら、この点を指摘したにとどまっている（Jenista, 1987, 熊野, 2011年）。アメリカ人とイフガオの人々との文化的な接触について詳しく述べる機会は別にもうけるとして、20世紀の最後の15年間に、イフガオがどのような状況におかれていたかを伝える責務が筆者にはあると考えている。

理由の一つに、文字化されてなかった社会が20世紀になって初めて外部勢力に接し、アメリカ合衆国、フィリピン委員会や総督の下で行政に従い始め、公道を建設し首狩りの禁止や公教育を受けた事情がある。しかしながらイフガオの人たちが歴史を書く主体というより、文字化されながら記録さえ取らず、またそのような実践様式もなく回帰的に過去を振り返る習慣さえ希薄な文化にあって、ある時代を語るということがいかなるものか考えるよすががとしたいからでもある。

例えば過去の事件を知るにも口伝えのため、年代が不確かである事実遭遇する。その事実を宣教にきたカトリックのベルギー人神父が記録しているのではないか、という予想に違わず、カトリックの文書館にあるのを確認した¹⁾。

1982年のイフガオ州バナウエ高校の火災があったが、イフガオの人たちは火事で焼け落ちたことに関心があり、いつだったのかはきわめてあやふやな記憶にとどまっていた。カトリックの文書館には宣教師たちの残した『通信』に記載があり、記録を残すという基本的な考え方に違いが見て取れる。それ以外にも1907年以降から80年代までのルソン島にお

1) 2010年関西大学在外研究制度により許された半年の調査研究期間中に、当初の4月はイフガオの地で継続調査を実施し、5月以降の1か月半は関西大学とも協定しているベルギーのルーベン・カトリック大学の日本語学科に受け入れられ、KADOC（カトリック文書館）に通い、イフガオで布教活動をしたラムプレヒト神父の経歴などを調べるうちに辿り着いた文書類である。この時ルーベン・カトリック大学日本語学科のヴァンデワラ教授に一方ならぬお世話になった。

ける山地社会の布教にまつわる、活動の記録を読む機会となった。

なるほどフィールドワークの体験を述懐するほどの業績を筆者が必ずしもあげたわけではないが、特にジェニスタによる、1970年代だったからこそ可能だった聞き取りと文献研究に触発されて、筆者がイフガオと呼ばれる人々と接触を開始した状況を伝えておくのも、人類学者としての使命と考えるからである。

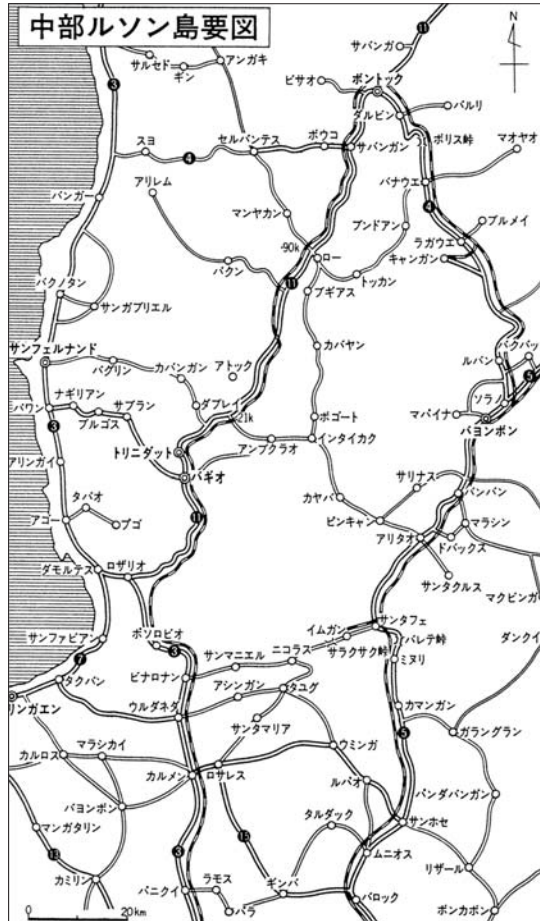
ジェニスタはアメリカ植民地期のフィリピン山地、特にイフガオの人たちの間でアメリカ人統治者がどのような方針の下で振る舞い、イフガオの巷間に1970年代当時のお記憶されていたのか実態を伝えている。この調査を実施していなければ、初期のアメリカ人とイフガオの関係を再現するのが不可能な研究であったと言える。実際に彼の研究の特徴は1900年代のアメリカ人行政官が残した公文書から私文書までを緻密に検討した歴史研究と、現地の人々のインタビューから記憶を辿るための調査という、人類学的手法との鮮やかな結合にあると考えられる。

これについても別に論文を用意すべきであるが、ここではひとまず筆者個人が直接見聞き体験した内容を記述することで、後の分析を準備したいと考えている。したがって記述的な研究の形式をとる。この時ラビノウが一時標榜した内省的人類学で扱ったモロッコ社会のフィールドワーク論（1980年）や、1950年代のオスカー・ルイス（1970-71年、2003年）があげたメキシコやプエルト・リコの記述的な研究が念頭にある。

本題に入る前に、なぜ筆者がフィリピン研究を志したのかを大まかに述べておこう。1981年の3月に復活祭の調査研究を実施した院生に同行して、フィリピンの低地文化に触れたのが最初の契機である。カトリック教会に1か月半泊めていただきながら、堅心礼の修行期間を過ごす若い男女たちと行動を共にした。日本人の行動類型や考え方に当てはまらない奇抜なフィリピン人の自由な文化に、何も考えないうちに魅了されたのがフィリピン研究者に共通する体験のように思われる。その後、ルソン島の山中をバスで旅行し、1981年の5月に初めてバナウェにいたっている。

この貴重な体験は、やがてフィリピンのような「文化のない」ところと周囲から揶揄される経験に変わる。また実際にそのような体験を記述している研究者もいる²⁾。個人的な体験では、欧米の研究者を中心に何人かが集まると、自身の調査研究に不満があるのか、必ずフィリピン人についての悪口を2時間近くも言い募り、やっと言い疲れて潮時を迎えた

2) Rosaldo, R. 1989, p. 197. 実際にはフィリピン人が「文化なき人々」とされ、普通のフィリピン人が「文化的貧困」にあって、アジアのどのような文化的伝統も支配的でなく、300年のスペイン人修道院と50年ばかりのハリウッド映画に代表されるアメリカ文化しかないと自嘲的に述べているのを指す。



地図1 北部ルソン島（東シナ海側）の地図（石引、1979年より転載）³⁾

頃に誰ともなく「だけどフィリピンの文化が好きなんだよね」と言い出す。すると即座に、その場にいた者の殆どがその言葉に同意する。そのような奇妙な場を何度か経験してきた。

フィリピン低地に滞在していると、カトリック信者たちの筆者に改宗を迫る態度に閉口したのも事実で、また当時、日本で人類学関係の文献で入手可能な論文は山地民研究にほぼ限られており、加えてロサルドウ夫妻による衝撃的なイロンゴット研究が出版されて間もない頃であったため、調査研究がまだ可能なように思われたのも大きかった。

そしてルソン島の北部山地を研究したいと考え、研究が手薄だと思われたカリंगाを想

3) タイトルに中部ルソンとなっているのは、下方のマニラから山岳部に立て籠った旧日本軍が配送した経路で、山岳部は上方にありイフガオの地名が出ている。カリंगाは更に北方である。

定して準備していたが、その当時カリングは共産ゲリラ、新人民軍とフィリピン軍とが戦争状態にある地で、さらに赤い神父と呼ばれ棄教後カリング女性と結婚したバルウエグがゲリラ戦を別に指導し、三つ巴の戦争となったため、やむをえず同地の調査を断念するに到った。それではどこに調査地を求めるか迷ったのも事実である。ベンゲット州はバギオに近く低地民との混住が進み、純粋な伝統文化を知る機会がないと判断し、ボントク族は既に合田濤氏が成果を出していた。それでその頃は誰も調査者がいないと思われたイフガオの地を選んだ。

準備期間中にフィリピン国語であるタガログ語を、当時アジアで井戸を掘るなどボランティア団体、「アジア友の会」で有料の言語講座があり、タガログ語会話の初歩コースに半年ほど通った。ルソン島の北部を研究するのであれば、タガログよりはイロコス地方の言語を学ぶべきだったが、日本にいるのではタガログを学ぶのがやっとであった。この経験は大阪外国語大学にインドネシア・フィリピン語学科が開設される以前の話で、当時同大学のタガログ語非常勤講師であった和泉模久氏に個人授業の形で別に半年、師事した。またその後、自身でも英語で書かれたタガログ語の教本で独習した。

以下に記すのは筆者が当初、調査地で遭遇した主要な人物で、主にアメリカ人の血を引きながら、イフガオの人間として生涯を終えた人物2人についてである。3人目のイフガオは政治家として汚辱にまみれながら、それを晴らし生涯を終えた人物についての記録である。最後にフィールドワークで初めてできたかけがえのない助手であり、友人でもある人物との経緯を描いた。

第1章 1980年代後半のマニラとバナウエ

筆者が長期の研究を計画し、客員研究員として受け入れられたアテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所はケソン市にあって、フィリピン研究ではアメリカ人の著名な人類学者・社会学者が所長を務めた、社会学者のM.ホルスタイナー女史の後に初めてフィリピン人のアルセ博士が所長を務めた年代にあたる。日本の大学研究機関では入手が困難だった文献を集め、初めて迎えたクリスマスや正月は、マルコス政権の末期にあたり1986年2月7日に大統領選挙を控え、何かが起る期待感と不安とがないまぜになった状況だった。

足りない文献を渉猟するなか、時に観光省やそのバギオ支所に山地の観光関係資料を求めました。その時にバギオの幾つかの大学やフィリピン大学バギオ校のコレディリエラ文化研究所にも足を運んだ。そのうちに日系移民の子孫などと知り合い、彼らへの援助や牛蒡の導入で有名なシスター海野に紹介された。シスターたちの住む女子修道院で1週間近

く泊めていただきもした。欧米出身の老シスターたちが暮らす集団生活を目の当たりにした。その滞在期間中に、シスター海野に連れられバギオ市郊外にあるイフガオ移民村の土産物のワークショップを幾つか見て回った。この時に後で知るロベス・ナウヤック氏の店にも行った筈である。

ケソン市では日本人の留学生仲間から、故バイヤー博士の弟子であったE. A. マニユエル氏を紹介され、氏を通じてバイヤー博士の孫にあたる長女と出会い、当時のイフガオ州バナウェ町にすむ異母弟のジェイムス・バイヤー氏への紹介状をいただいた。バイヤー博士とはフィリピン研究者なら言うまでもなく、フィリピン大学人類学創設時の教授であった。彼はドイツ系アメリカ人であったため旧日本軍からも保護を受けたのは、当時の日本人民族学者との縁があったからである。

研究の合間にしばしば大統領選挙運動の集会をのぞきに行き、その中には所属した大学の体育館でフィリピンの国民的歌手であったフレディ・アギラー氏が応援するアキノ氏の前座に、3曲ばかり歌を披露したのにも立会っている。選挙当日からは開票までの数週間を経て、マルコスが選挙の勝利宣言を行った後、軍部クーデタが起り同調した人々の「エドサ革命」もマニラにいて体験し、マルコス元大統領がハワイに亡命した翌日には、マラカニャン宮殿には民衆のなかにまじって乱入したが、すでに荒らされた後で宮殿内部は見る影もなかった。このような民衆の蜂起と血を流さない「革命」という、その後の世界的な体制が瓦解する変化の前触れとも思える貴重な体験のなかにあっても、調査地に行きたいという気持ちには変りがなかった。

フィリピン低地ではクリスマス前に浮かれた男たちが9月くらいから、音と煙の凄まじい花火を楽しむ。その騒音の文化がどこに由来するのかは定かではない。しかし自由、解放の象徴である米軍ジープに似せた乗合い自動車ジープニーにあふれる街路で、クラクションの喧しさにも通じるものがある。またアメリカ文化の影響の強さは、映画館やホテルのトイレなどの男子便所に典型的に見て取れた。小用の方はアメリカ人に合わせるのか受け口が高く、大便器には一様に American Standard と記されて大きく、滑稽なまでに自由なアメリカ礼賛のように思われた。

当時、バナウェにはパントランコ社の長距離バスで入るのが常であったが、当時の世相を物語るかのよう、この会社も1986年3月にイフガオの州都ラガウェで人身事故を起こしたために、報復を恐れ路線から撤退した。その後はバギオのダングワ・トランコ社が路線を受け継いだ。これはバギオに拠点を置く元知事ダングワ氏一族の経営であるが、エアコンもなくシートも破れて剥き出しの板のベンチがほとんどの酷いバスであった。九十九

折りの山道を走るため、新品のバスでさえ背もたれについている筈の取手もすぐにねじ切れてしまうのが実状で、それほどカーブがきつい山道だという証明でもある。

1990年代にはオートバスやフロリダバスと言った会社がマニラーバナウエ間の路線に乗出したが、これらも実際には路線バスの免許を取得していないと聞くから、フィリピンの行政、特に公共交通省の認可制には疑問が晴れないままである。ともかくこの2社が競合した状態から2012年まで、フロリダバスが唯一直接マニラとバナウエを結んでいた。90年代に経済が安定した結果、マニラまでの公道に自動車や三輪バイクがあふれかえり、80年代には8時間の昼間のダイヤだったバス運行が10時間、さらに12時間を越え、とうとう昼間の喧噪を避けて夜間運行になってしまった。現在では数社のバス会社がバナウエと低地の都市や、山地の中心地であるバギオ市とを結んでいる。またイフガオの地元が出資するバス会社も現れだした。

8時間の運行が組まれたとは言っても、80年代はバスのメンテナンスが悪くタイヤ交換は当たり前で、エンジンが止り修理の見通しもたらず、夜中に見知らぬ街で降ろされたことも何度かあった。また時間どおりに目的地バナウエに到着する方が珍しかった。それは1か月から1か月半毎に、マニラに現金をおろしに行く旅でもさほど変りがなかった。というのも銀行の支店が少なく、マニラに行く方が容易だったからである。また国際電話も途中の町までしか繋がっていなかった。このような中で、楽しみと言えば途中の休憩所での食事で、山地に近づくにつれ野菜が豊富に用いられるのが嬉しかった⁴⁾。

最初バナウエ入りの際にも夜中の深夜に到着し、これでは宿泊所を確保することもかなわないと考え、バスの乗客で年齢の近い男性に声をかけ泊まらせていただいた。1981年の電化されていない街のイメージそのままの記憶があって、思い返すと当時は電力事情が悪く（マニラでもさほど変わらなかった）、頻繁だった停電でも起きたのだろう。その後、なじむことになったランプ生活の前触れのような宿泊であった。

その若者はマニラの建設会社に努める技師で、翌朝は友人の結婚披露宴への出席と急な葬儀にでる予定があり、誘いに応じて同行した。披露宴はイフガオの典型で、山地のため広場が少なく公道を利用しビニールシートで日よけ雨よけにして、村総出で300から400人程も群れ集い、振る舞い酒と豚肉の煮物に炊きあがった飯を食べる。皿など間に合うわけはなく、バナナの幹を切って皿代りに使い手で食べていた。今になって思えば、フィリピ

4) 実際にフィリピン人の野菜摂取量は少なく、豊富な果物がビタミンや繊維を摂取するからだろう。野菜を軽侮する気持ちもあるから、所得が高くなるほど野菜を軽視していく傾向も見取れる。

ン流の楽しければ良いとする態度はパーティの後に良く現れている。低地流でもバリオ・フィエスタと呼ぶパーティの形式と同様に、イフガオでは食べ物の種類こそ限られるが、乱雑に食べ散らかし混沌とした状況を典型としている。もちろんレストランなどで欧米風の正餐を楽しむ上流階級は別なのだろうが、一般的にフィリピン人はその自由さをこの上なく喜ぶのだろう。そしてそれは今日、フィリピンの都市中間層の行動でも変わらないと感じている。

昼食後、直ぐに山道を下ってバガバン村に向かい、途中に険しい大岩を登る羽目になったが、暑い季節でつい薄いビーチサンダルを履いていったため登るのに難渋した。岩には僅かな切れ込みがつけられてはいたが、風雨などで浸食されており、筆者などはなりふり構わず手を使わなければならなかった。先導した若者と言えは手など使わず、その平衡感覚の良さに山地民とは何か理解したような気がした。

目的の村に着いた時、イフガオ式の故人が自分の葬儀に立ち会う、つまり軒下で柱を背に死者の椅子が用意され梁から紐で支えられた亡骸の前で、飯を出された時には閉口しながらも無理矢理口にした記憶も生々しい。この風習はおそらく死因を村人に明らかにするためなのだろう。アメリカ人の研究書などには首狩りを免れたものの槍を身に受けた、なぜか女性の遺体を撮った写真ばかりが掲載されて見知ってはいたが、実際に目の前で食事を摂るのは意味が違った。

フィリピン政治で大統領選挙キャンペーン期間は社会的緊張が高まるから、政治的な暗殺事件は表面に出るだけでも100件を越える年も稀ではなく、事実マルコス最後の選挙では200人近い犠牲者が出た、と現地で報道されたのを記憶する。そのような政治的犠牲者の遺体が死後1週間経った後、銃弾の跡も生々しく教会に安置され葬儀を待つのが見ることがあったし、TVニュースで、遺体を放映する例も多く、我彼の文化的差異を知らされる思いだった。

またマニラなど都市部ではアキノ女史に期待する声は大きかったが、地方ではマルコス派が根強くバナウェではマルコス派の配るTシャツやグッズであふれていたし、小学生までも「マルコスをもう一度」とタガログ語で叫ぶ姿も、選挙後でさえよく見かけた。ただ実際の投票結果はイフガオの人々は変化を期待するのか、アキノが勝利した唯一の州で、ルソン島山地域でも特異な自治体である。このような状況下でバナウェ到着の数日後、ジェイムス・ベイヤー氏の家を訪ね、下宿させてもらうことに話が決着した。

第2章 イフガオ州バナウエ町とアメリカ人入植者の末裔⁵⁾

ここでは筆者の頓挫した観光についての調査と諸事情とともに、地元の友人や政治家を扱うことになる。

第1節 ジェイムス・ベイヤー氏のこと

同氏の庇護下での下宿生活は今、振り返ってみると、イフガオの生活になじむ端緒としては妥当であったのかもしれない。何よりも水洗便所が備わり熱いシャワーを浴びることも可能だったからである。食事にも肉や魚、野菜をふんだんにつかい、朝や休憩毎のコーヒーも保証されていたからでもある。コーヒー豆を炒って粉に砕き、薬缶に直接かけるカウボーイスタイルと称される乱暴な代物で、焙煎の程度が浅くさほど旨いコーヒーではなかった。これも数年後、3代目として雇った助手は味になかなかうるさい男で、彼に焙煎させたコーヒーは旨かったから単純に技術上の問題である。既にバートンの研究からイフガオの地にコーヒーの木があることも⁶⁾、フィリピン各地でまだ当時、簡易なホテルやレストランでも飲むことができたフィリピン産のコーヒー豆が、スペイン人由来の大粒なアラビカ種であることも知っていた。

ベイヤー家の親族とも知り合いになり使用人らと起居を共にし、ベイヤー家の問題にも行き当たるようになった。ジェイムスはジミーと呼ばれていたが、父ウィリアムに養育を拒否された息子であり、その父は未完の論文数本⁷⁾を残した以外、美術商としてイフガオの工芸品を売買していた。ラビノウ風に言えば父親の方は文化のプロカーと見ても差し支えないだろう。またバナウエで最初のロッジを経営したことで知られている⁸⁾。マニラ市内でも幾つか店舗を構え、係累が関係したと思われる旧スペイン人街イントラムーロス

5) バナウエでは町とシンドゥアンは郡としているが、いずれも英語では municipal である。スペイン語の municipio では教会がある街区を指すのであろうが、バナウエでは役場中心の町づくりで教会は街外れにあり、フンドゥアン郡では役場も教会も中心を構成しているかは疑問である。マニラの商業区マカティも municipal を名乗るし、city を採用する行政単位もあってフィリピンでの行政単位は分かりにくい。ここでは人口規模などを勘案して翻訳上、区分しているが、いずれも大きな村を想像いただきたい。

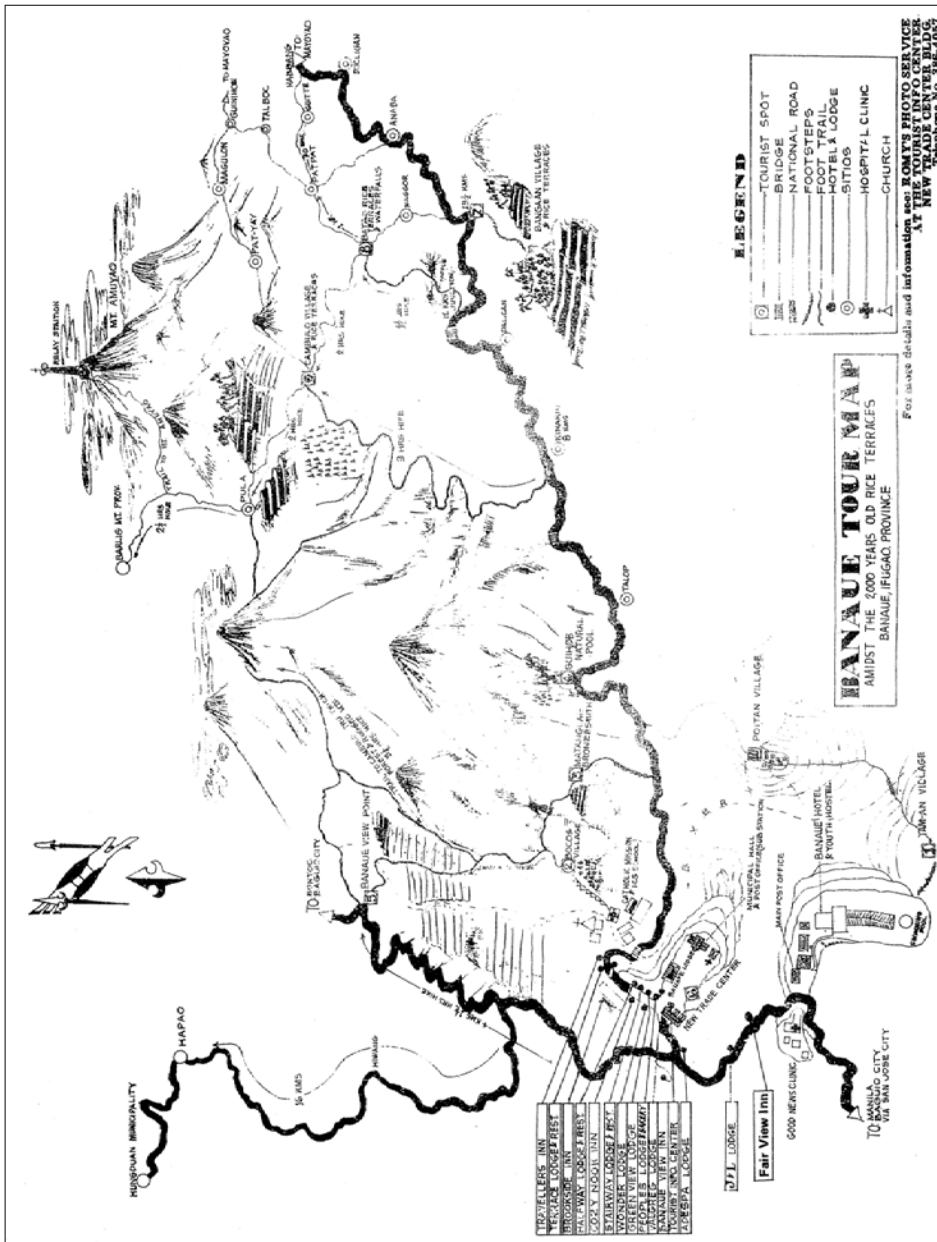
6) Barton, 1920.

7) Beyer, W. 発行年不詳。ジミーからいただいたカタログで、おそらく1980年代、美術商が集まってマニラで展示会を催し、「イフガオの芸術」という短い文章を寄せている。掲載がなかった文章の手稿を見せてもらい、そのメモが手元に残っている。父親譲りでイフガオの文化に造詣が深いことが見て取れる。また筆写した二次埋葬についての論文もある。これは1965年に亡くなったベイヤー博士を二次埋葬にふした記述で、おそらくは1970年に日本のテレビ会社が撮影し放映されたと指導教官の一人であった梶原彰昭先生から聞いてはいたが、ついでその映像資料を見たことがない。別の論文はまたコンクリンの『イフガオ文献集』15頁には、言語研究やフドゥフドゥアリのテープ記録に貢献したとあるが、確認していない。

8) CICM, 1982, p. 52.

にあった店舗では、イフガオの10数メートルはある、威信を表す伝統的な長椅子ハガビを店外に展示していたのを記憶する。

当時父のウィリアムは既に脳梗塞で倒れ半身不随で、話もおぼつかなかった。一度、彼



地図2 バナウエ観光所発行観光マップ

の居宅のある、バナウェから8km隔たったアムガナッド村の収穫時に会い、何を思い出すのか椅子に座りながら意味をなさない言葉を吐き、目に涙をためた姿が思い出される。

ジミーの母親はマヨヤオ出身でイフガオ女性にしては背が高く痩身であり、ただ内斜視がきつかった。彼女はジミー宅をしばしば訪問していた。

ジミーは父親に養育を拒否されたが、不憫に思ったベイヤー博士の友人でドイツ系アメリカ人の化学者だったエヴェット・ヘスターに養育され、彼の財産を引き継いだ。その相続した居宅はイフガオ様式の総ナラ材、茅葺き屋根の家で、木の扉にも食卓の脚や、イフガオの白を利用したと覚しきストूलもナラ材で、レリーフを施した立派な意匠であった。イフガオ工芸品の収集にも優れ槍ばかりでなく、イフガオが海洋民であったのを物語るような鉢もいくつかあった。また、イフガオの職人に作らせた木彫工芸品もなかなかのものだった。

養父の収集品はジミーが政治家に転身した際、権力者への贈り物として1990年代後半には散逸し始めた。せめて写真にでも撮っておくべきだったと後悔している。書斎にはベイヤー博士の書き残した『フィリピン・サガ』や、C.ギアーツ著のIslam Observedがあり借りて読んだ。前者はフィリピンの民族的な起源を、大陸ではなくインドネシアやマレーに求める説であるが、現在、研究者からは支持されていず、筆者も物語としては良くできているが、アジア大陸との関係は否定できないと考えている。

イフガオ様式の家屋は本来なら一間で狭いが、ジミー宅は主寝室と子供部屋に書斎と居間兼食堂、台所とトイレ、シャワー室を階上に配置していた。階下には若い使用者や運転手の共同部屋で、シャワー室とトイレも備わっていた。私はといえば玄関脇の小部屋で机とベッドは保証されていた。岡の東斜面にあり雨でなければ毎日のように朝日を身に受けた。ただベッドの下は雷管を抜いたダイナマイトがぎっしり詰まった櫃があり、最初のうちは気になって眠れない夜を過ごした。

ダイナマイトがあったのは、ジミーの職業が建設請負で必要だったからである。また山地で現在イフガオの地でも当たり前にもみるショベルカーや、ブルドーザーなど重機もなかったからだろう。ジミーが所有していたのは、ダンプカーと20年以上の古びたトヨタのランドクルーザーが1台ずつで、それぞれ運転手を雇っていた。ジミーがどのような経緯で建設業に転身したのかは定かではないが、英語の契約書など文書に強かったからではないだろうか。

ジミーは青年期、ドゥマゲテ島の名門シリマン大学で医学を志したが志半ばで放棄し、最初の夫人との出会いと結婚なども影響したのだろうが、直接その理由を聞き出しなどし

なかった。フィリピン中部の多島海に広がるビサヤ系だった夫人とは1男1女をもうけ、学資援助のおかげで妻は医師になったが、ジミーとは別れた⁹⁾。

子供たちはジミーが引き取り、記憶に間違いがなければ13歳と11歳だった。兄の方は母親に似たのか、肌の色も黒くいかにもフィリピン人という顔つきで、妹の方はジミーに似ていた。どちらも栄養状態が良いからか小太りであった。ジミーは厳格な面もあり、時に兄の方は脛脛を細い棒で叩くのはある種の伝統だったのだろうか、イフガオには似つかわない所行であった。

それに日本の戦後復興の見事さと、日本人気質である規律への服従精神をその理由に挙げるのが常だった。この服従精神は当時のフィリピン人から見た日本人の典型だったのだろう。それは以下に扱う地元政治家の言説とも同じだった。

マヨヤオ出身の第2の妻との間には、3歳になる男児をもうけていた。二人の頭文字JとDをとって、当時人気だった映画『スター・ウォーズ』からジュダイと呼んでいた。これはイフガオの人たちには最近の命名法である。

ところで兄の方はバギオで有名なブレント高校に在籍していたが休学中で、上述した大火の後、トタンで急ごしらえしたバナウェ高校を「豚小屋」だと呼んで転校するのを嫌っていた。妹の方はジミーと異母妹の子供たち、つまりイトコたちと年齢が変わらなく完全になじみ、地元の小学校に通っていた。

彼らのイトコたちの母はウィリアムの正妻の娘でジミーより年下だった。彼女の夫はヒンギヨンの出身で、夫婦揃ってコッポラ監督の『地獄の黙示録』で、エクストラを努めたアムガナッド村の数百人の世話をしたというのは聞き及んでいた。そのタイトルバックに謝辞がアムガナッドのイフガオの人々に向けられたのは、劇場公開時には記憶はなく、帰国後、同映画のビデオを借りて確認した。

先にも述べたようにマルコス政権末期からアキノ政権へという政治経済的な混迷期であり、契約の支払い状況が悪化したのか、直接事業に携わった様子は見かけなかった。ただコーヒーを飲みながら数日遅れて届く新聞に毎日、目を通し、友人たちの不在時にはカードの一人遊びをしていた。彼のもとには毎日のようにコーヒーや軽食、食事を求めてバナウェの知人ばかりでなく、マヨヤオからの来客が多かった。

ただ滞在中に2度ほど正装しアタッシュケースに数10万ペソを詰めて、低地にあった關

9) これも後になって知ったのはカトリックを国教にしている国々で、離婚を現在も認めていないのはベネゼラとフィリピンだけである。それ故に愛人社会になっていて、それはイフガオの地では露骨に表れないが、必ずしも例外ではない。またイフガオとフィリピン中部の島の多いビサヤ出身者の婚姻が多いのも不思議ではある。

鶏場に足を運ぶ姿も見かけた。当時の為替レートは1ペソが10円だったから、数100万円の大賭博である。

若妻を伴って彼女の実家があるマヨヤオに戻るのに、筆者も同行したことが2度ばかりある。使用人たちも全てマヨヤオの人間であったから、使用人たちには休暇にあたるのかもしれない。バナウェからマヨヤオに入るには未舗装の穴だらけの道路にジープを使って低速で行くしかなく（これはイフガオの旅行にはつきものだったし、今は少し改善された程度である）、45キロの道のりを5時間以上かけるより他に方法はなかった。それも1時間毎に休憩を入れラジエータに水をかけて冷却しながらの移動だった。

マヨヤオに到着するのが夜半になることもあり、その時公道沿いに傘をさしながら若い男女が語りあう姿を何組も見かけた。これもおそらくは公共の場が少なく、また昔の娘宿のなごりで試行婚ともとれるような習慣の名残とも思われた。

それでもバナウェからマヨヤオにいたる公道には、棚田群のなかでも名勝の地で後にイフガオを描いた映画『モンバキ』の舞台にもなった美しいドクリガン村を見下ろし、あるいは三方を棚田に囲まれたバタッドを遠望できるのも楽しい移動であった¹⁰⁾。時には川を遡りハバットと呼ぶ地の深い淵にでて、若い者たちを使って違法ではあるがダイナマイトを仕掛け大きな川魚をとり、野趣にあふれたバーベキュー料理にして舌鼓を打った。

マヨヤオでは雨期から乾期に変わる3月の2日間ほど、カブトムシが空を覆う程、大量に発生するのを目撃したのも貴重な体験である。これは家のなかに閉じこもる生活を意味している。カブトムシもイフガオの厳しい食料事情では、貴重な食材であったようである。これもトンボの幼虫であるヤゴやカゲロウなども食べていたことは後になって知った。もちろん筆者の調査時点では昆虫食を実践してはいなかったようであるが、これも僻地に住む人々ではどうだったのかは明らかではない。

自然にあふれるイフガオの地で蛇が枝伝いに別の樹木に移るのを見たとし、下宿部屋から早朝、扉をあけると蠍がいるのを2度、見たことがある。蠍とは言っても小さく毒性が強くないらしい。その後、カメレオンを目撃したこともある。このように自然豊かと形容するのは可能だが、個体数が少ないという印象を持っている。

筆者がアレルギー体質で虫刺されに弱いことは幼少の頃から自覚はしていたが、ジミー宅の下宿を引き払いフンドゥアン郡ハパオ村に調査地を変えてからも、様々な虫に悩ま

10) 1996年、劇場公開されたタガログ映画でタイトルのモンバキ、それには変化形があるがイフガオの伝統的祭りを表す。人々の期待を集めたが、出だしの登場人物がイフガオでは女性名なのに男性俳優が演じていて、イフガオ族の人たちから大失笑をかった。首狩りの報復儀礼でロシアンルーレットばりに、円陣を組んだ人たちに首を切られた鶏が止まった人物が主導すると定める、生々しいシーンは往時を映し出すのに成功したと言われている。

れることになった。前述のアムガナッド村では鶏の籠の下に座ろうとして、ジミーに制されたことがある。実際に検分してみると、鶏の羽の付け根で柔らかい箇所小さな「シラミ」がいて、赤い点のような虫だったが、これに噛まれると原因不明の発熱を繰り返し、体力のない者であれば死にいたるといふ。これは恙虫病ではないかと考えているが、そうならシラミではなくダニの類だろう。

ジミーとの下宿生活のなかで自ずと、防虫にたいする考え方が身についたように思う。他にも旧日本軍が残した軍用犬の血を引く柴犬をジミー宅で飼っていて、フジと呼んでいた。イフガオの伝統的な飼い犬は愛玩動物などとは言いがたく、名付けず夜間など放し飼いである。それでフジは棚田に出て遊び相手の水牛につくダニをもらって帰り、下宿部屋の扉前に敷いたマットに何度か寝ていた。それが卵を孵し大量のダニがわき出して駆虫剤が間にあわなかったほどだった。ダニの大量発生を2度程繰り返した後、ある時マニラから戻ってきたら、従業員の誕生日にフジを屠り食べてしまったという。犬を食べるのは飼ひ豚に余裕がないのにパーティを開く必要に迫られた時だが、元々は邪術の供犠にかけて共食にしたのは後で知った。

ジミーとはふんだんに時間もあったから十分に会話できたし、筆者自身が研究上負うところの多かったバートン博士の人となりを聞きもできた。例えばイフガオが無信仰であることから書かれた著作『フィリピンは無神論者』Philippine Pagansに由来して、バートンというpaganという言葉を口にした。ジミー自身はアメリカ人養父の影響からカトリック教会に通うのは稀であったので、まさしく無信仰者に回帰したと言えそうなのである。

またバートンがプレイボーイタイプの男で、村毎に「妻」を持っていたと聞いたが、実際の妻の名前を特に質したことはなかった。これも後述するイフガオばかりでなくフィリピン研究の大家とされるコンクリン博士の妻が出版した記録に、バートンの妻の一人である女性の実名があがっている¹¹⁾。

コンクリン博士の研究プロジェクトの実態が、いかなるものなのかもジミーの口から知ることができた。既にイェール大学出版局から『イフガオの民族地図』を出版していたか

11) Conklin, J. M. 2003, 58頁にバートンのイフガオ妻について実名で記載されているが、何番目だったのかは不明で土地の名前も特定できない。振り返ってみると、Jenista, 1987, 220頁にも、キーアンガンで小学校教師時代に6年間の事実婚が記され、更に222から223頁には、別の土地で2番目の妻についての記載がある。バートンは物真似が得意で旧日本軍の捕虜になっても、戦後の出版物に朝の日本式挨拶をオハイオと洒落ている程だから、どこか憎めない男だったのだろう。ただし彼は戦後間もなく亡くなっている。また1930年代に訪れたロシアで現地的女性との間に一子をもっている。アメリカ人入植者とイフガオ女性についてはまた別稿を用意したい。

ら、その地図がスペイン語で書かれた古地図の復元などとともに、アメリカ空軍を使って航空写真を大量に掲載していて、なかにはNASAを利用したとしか考えられない衛星写真もまじっている。彼の研究自体は合衆国の国防などの関連とともに捉え直さなければならぬだろう。その上、バナウェ郡の村落から伝統的祭司を10名近く、アメリカ合衆国に連れ帰り、祈祷や神話などの口頭伝承を大量に録音したと聞くと、その成果は残念ながら学術的に還元されていないようである。

コンクリンのイフガオ語能力の高さにはジミー自身、舌を巻いていた。しかし、一世代前のアーヤガン方言で老人でもなければ分からないと言い、これも社会の変化と文化保存、開発との関係を考えさせる大きな問題である。またコンクリン博士が文化保存に努めるあまり村人の意向を無視して、小学校も診療所も建設させず電気も通さなかったとし、筆記具、文具だけでなく乾電池などもまだ使用可能なのに、村人に分け与えファーザー・クリスマス、つまりサンタクロースと村人にあだ名されていた事実を述べ、ジミーはいささか批判的でもあった。

他にもアメリカ人でルソン島山地民研究者に著名な W.H. スコットは常に少年を従え、同性愛者だろうなどという現地の間で広まる憶測も聞いた。後年、国際フィリピン研究会で同氏の姿を見かけたが、すでに高齢でありその片鱗も窺えなかった。

ジミーの親族には合衆国に移り住んだ者も多く、英語も上手いのにどうして移民を考えないのかとも聞いてみたことがあった。実際に氏を紹介してくれた長女は合衆国に移住している。氏の返事は肌の色が異なるから人種差別を受けるのはごめんだというのであった。学生時代には祖父を知るアメリカ人の人類学者や社会学者と行動を共にしていたらしく、彼らの世界を垣間みたのかもしれない。

厳格な父親としての姿は述べたが、以前からジミーは糖尿病に悩んでいたようだ。筆者がマニラに行くときには、ナッツと干した果物入りのチョコレートを生産に買って来てくれと必ず頼まれた。これは子供用というよりは自分自身が食べていた節がある。後になって夫人から聞いたのは甘さに飢え、夜にベッドで泣き出すことも多かったと聞いている。

1995年にはイフガオ州議員に選出されたと聞いて筆者も喜んでいたのであるが、1期3年間だけにとどまり1998年の選挙に敗れている。2000年に心筋梗塞に倒れ亡くなったと聞いたのは2003年の事であったが、残念ながら遺族は筆者に連絡をとってくれなかった。

このようにジミー・ベイヤーの一生を見ると、婚姻外の男女関係から生まれ、祖父の友人から財産を継ぎ、イフガオのなかでは恵まれた境遇にありながら、祖父のような名聲に浴することもなく、また父親のイフガオの文化的遺物を扱う「文化的ブローカー」として

の道を選ばず、イフガオやフィリピン人として生きようとしたのだろうが経済的な停滞に思うにまかせないまま、習慣などはアメリカ文化を引き継いで生涯を終えたというよりほかはない。

一方で、一族が祖父バイヤー博士の遺産を食いつぶしているという研究者での、不評を耳にすることがあった。それはオーストラリア国立大学（ANU）に博士の残した原稿類を売却して聞かなかったからである。実際に1989年にANUの友人を訪ね、図書館の書庫に入って一部書類を確かめたが、整理がつかないままで素人がとても手を出せる状態ではなかった。これも今世紀になってフィリピン人の研究者がANUで整理して目録を作成しているから、資料は玉石混交かもしれないが、研究する価値があるかもしれない。

以上が最初のイフガオ体験にまつわる初期の事実と、ジミーやバイヤー家にまつわる記憶の筆者なりの記述である。どこの日本人学者かは知らないけれども、バイヤー家とつながりをもとうとした研究者として、筆者がすでに悪い噂の対象になっていたことは聞いて知っていた。

このようなジミーの人脈に囲まれ当初バナウェでの調査を考えていたため、バナウェに顕著なアーヤガン方言を学ぼうと、マヨヤオ出身のポール某について習得につとめたことがある。このポールも異彩を放つ人物でマルコスの主導した新社会運動の一環で、マルコスの長女アイミーが全国青年団組織の会長に就き、その副会長を努めたと自称する人物であった。

ただ政治的な活動に幻滅したのか、アメリカ平和部隊の隊員たちにイフガオ語を教える職について低地にいたようだが、結婚と育児でバナウェに移り住んでいた。週に一度数時間のレッスンを受けたが、発音や抑揚の付け方で戸惑うことは多かったし、イフガオ語の文法を英語文法に影響を受けた概念用語で説明されもした。これは日本語文法に置き換えるように自覚するまでに時間がかかった。

イフガオ語の習得には半年以上続けたがなかなか難しく、またバナウェの観光が社会や文化に与えた影響が研究テーマであったため、当時アメリカ人観光客が中心で英語に通じるイフガオが多く、聞き取り調査を実施するにも英語が主になってしまった。また実際にはイフガオ語方言も複数まじり、イロカーノ語やタガログ語を話す低地民も混じっていたから状況は複雑で、暇そうにしている土産物屋やレストランの調査が主で勢い英語に頼る調査となった。

ロッジなどの経営者はバナウェ内外の地元政治家たちが経営する場合も多く、実際には筆者のような日本人の青二才に、観光についてばかりでなく政治の世界の裏側について発

言をもらすような義理もなく、利にも聡い側面はありながら実際の宿泊者名簿などもいい加減で記録が完全ではなく、実態に迫るのはついでかなわなかった。このあたりも、大事なことは語らない稲作農耕民特有の沈黙の文化を今でも感じざるを得ない。

このような訳の分からない調査をした上に人類学者を名乗ったものだから、アメリカ流の人類学者よろしく人々に考古学者の印象を与えたのと、日本人であることから太平洋戦争中に山岳州に立てこもった山下將軍麾下の旧日本軍が隠したと現地で神話化している財宝探しの誤解を受け、宝の地図と称される得体のしれない地図を示し解説を迫る客たちに辟易した。これはその後、土地を変えて調査しても常につきまとい常態化している。旧日本軍が攻め入るにしても、大縮尺で地形を読み取れる地図を作成していたはずだが、見せられた地図はフィリピンの小縮尺の地図ばかりで地形が反映されず、記号は日本人が考えもつかない代物で、筆者には意味を見つけ出せなかった。それでもイフガオの人たちにとっては真剣な話であり、邪険にあつかうには危険とも感じ、知らないことをどのように証明して失礼のないように、いかにお帰り願うかが難題だった¹²⁾。

そのようななかでも収穫儀礼、葬儀や結婚式なども参与観察し、おおよそのイフガオの儀礼とはいかなるものか親しんだ時期でもあった。ジミーの故郷であるマヨヤオでの葬儀にも立ち会った。西洋式の棺桶に入れられながら、顔が見える部分はガラスの小窓があり、死者が自らの葬儀に立ち会う意図は確認できた。

当時は常設の市場がなく、土曜の度に立つ市の午前中には遠い村から徒歩で織物や野菜を携え民族衣装に身を包んだ女たちが多かった。中には刺青を入れるか肘をコイル状の装飾品をつけた老女が稀にまじった。その頃の特徴として、古着がボランティア活動の一環なのか売買されたのかは定かではないが、日本の中学校で使われた名前入りゼッケンをつけたまま体操服を着ている老人たちが、穂先をとった槍を杖代わりに歩く姿を見かけることも多かった。全体的に大人も子供も、きれいな服装をしていたとは言いがたい。これも10年後くらいには、小綺麗な服装に変わって行く。

土曜の市では、大規模なテントがけに様々な商品を並べたてる低地商人であふれていた。ちなみに町役場の前にトレードセンターと称される街区があつて日本兵のものとされる頭蓋骨も2つほど陳列されていたが、1990年代半ばの大火で焼けてしまったのか、その後、見たことはない。土曜日の午前中は人であふれかえり、その一角には悪名高いフィリピン

12) その後も正確な地図を得るには苦勞することになる。マルコス政権末期で地図を発行する機関の所在が分からなくなり、その後90年代半ばに所在を突き止めたが、地図は軍事上の観点から小縮尺の地図しか市販されず、また地名なども誤りだらけであった。これは当時市販された道路地図でイフガオ州都ラガウェの記載がなくバナウェとあり、バナウェが2か所記載されていたのも、出版社のイフガオに対する無関心の好例だろう。

警察隊が機関銃つきジープに乗り、警戒にあたっていた。

午後ともなると市は引き払われ、後に残された大量の灰塵と犬や豚の糞で汚く、男という男は酔っぱらい喧噪は一層高まった。警察隊の兵士たちも非番の者が酒を飲むのは普通で、この年、イフガオの男に丸太でどやされ亡くなるという事件が2件別々に起きた。いずれもイフガオの現地妻を持ちながら、妻の親族を侮辱したのが原因であったと聞く。その時の犯人が捉えられたという話は聞かなかった。

また警察隊兵士の酔っぱらいが自動小銃を撃つ音が毎週土曜の夜に衍した。この警察隊はアメリカ人の行政が始まって以来の歴史を持つが、腐敗が甚だしく、ラモス大統領が政権に就いた1992年から間もなく解散された。また土曜市に貧しい低地民が自らの子供を売りにきて、警察に捕まったという話も2件ほど耳にした。

高校も初めてイフガオの地に足を踏み入れた1981年の4月には立派なままで、約5年後の1986年に再訪すると、大火にあって灰燼に期し再建されたのは先述のとおり、豚小屋との形容がふさわしいようなトタン屋根のバラックであった。実際には1982年4月の火事であったことは、ベルギー人神父で布教活動の雑誌で知ることになる¹³⁾。

とは言っても1980年代後半には、バナウエ町ばかりでなく対岸のボコス村にも、かなり人家が密集してきたが、それでもバナウエ町周囲の棚田群はまだ美しく、ボコス村の収穫祭などでは、闇のなかに樹木の隙間から漏れる松明の灯りや、ドラの音が響くのを遠くから聞くのも、また早朝の霧や靄に包まれた谷や雲が龍のようにたなびくのを見るのも山の生活ならではの楽しみでもあった。

観光庁のポスターでよく使われる字ビューポイントからバナウエの棚田を映す写真は、日本人でもかなりの人が目にしていないのではないかと考えるが、その「景観場所」に人家があふれだし、やがて1つの村のようになっていく。これらは棚田群のただ中でも起き、1990年代の風景とは雲泥の差がある。

第2節 1980年代のバナウエを中心とした地元政治家たち

日本で既に読んでいたイフガオ州1970年の知事にたいする暗殺未遂事件が、直接、自分の調査に影響を及ぼすとは、バナウエに入った当初、予想だにできなかった¹⁴⁾。1986年8月にはアキノ政権下で進められた、マルコス元大統領と関係の深かった政治家を公職から除き、新たな首長の任命がバナウエや周辺の自治体にも及んだ。

13) CICM, 1982, p. 52.

14) Dumia, 1979, p. 79.

当時のバナウェ町長だったベンジャミン・カップルマン氏には観光の実状を知る目的で既にインタビューをしており、またバナウェ町史を編纂したとも聞いている。但し、他ならぬコンクリン博士に貸したままとなっていると聞いた。

ところで、この町長夫人であるエヴェリンは旧姓が石橋で、ミドルネームとして用いている。彼女はベンゲット道路建設の日本人初期移民で3世であった。母方の祖父が石橋氏で現地女性と結婚し父方の両親はともに日本人であったが、なぜ母方の姓を受け継いだのかは分からず仕舞いである。こちらも戦後、苦勞したのだろうが、そのような話をするともなく淑やかな女性であった。夫人の方も国営のバナウェホテルの職員（その後、マネジャーに昇格した）でもあったから、話を聞いたことがある。その後、1990年代に和歌山に住む親族が彼女を呼び寄せ、日本の新聞に載った記事を記憶している。

カップルマン氏は新首長の任命が発令する1月ほど前から、公職を追われるのを予想してか酒気まじりで赤い顔をし、町役場前のトレードセンターを歩き来していた姿が目につく。不安がったのは町長だけでなく、他の会計や町議にあたる評議員も、あまり変わらない有様だったから、町の行政も機能してなかったのだろう。

彼はおそらく1989年にイフガオ州知事に転身し1期（3年）をつとめて、イフガオ州選出の下院議員となって国政に乗出したのは、1992年から2001年5月末までで3期9年間を努めた。その後、夫人を知事選に出馬させたりもしたが上手く行かなかった。

ベンジャミンの祖父はアメリカ人下士官ダニエル・カップルマンで、イフガオ女性と子供をなしたが正式な婚姻でもなく、イフガオの結婚にも適っておらず、その子アルフレッドは養育を拒まれ、母方との関係も上手くいかなかった¹⁵⁾。ただアルフレッドも戦後間もない1947年から1951年まで、イフガオ準州最高の地位にあたる副知事に就任している事実が確認できた¹⁶⁾。

孫にあたるベンジャミンも養育を拒否されたようで、自らそう応えているが、事情は尋ねなかった。苦学して代用教員を経て、小学校校教員になった経緯がある。また当時の教え子に地元で政治家となった者が多いから、バナウェばかりでなくイフガオの教育界がベンジャミンの集票機関となっていた可能性がある。

この夫妻から詳しく話を聞きたいとは思いつつ、十分には果たせなかった。2005年9月3日に第二次世界大戦勝利60周年記念式典を参与観察する為に、短期の調査に出た際、

15) Jenista, 1987, p. 198. これにカップルマン家の事が書かれているが、ダニエルの妻リングユの事実婚以来、アメリカ人と現地女性との婚姻を正式な手続きを要求するイフガオの動きが強くなった。また <http://www.angelfire.com/ca2/Ifugao/ifugao.htm> の Ifugao sub-province の項にも。

16) Ibid. アルフレッドも政治家になって大成したと述べているだけで、年代などは Dumia, 1979, p. 76. による。

夫人の死が伝えられ友人たちと連れ立って弔問に行った。その1年後にはベンジャミンが亡くなり、その葬儀にも偶然、出席することがなかった。

イフガオの葬儀は最初の葬儀から数年を隔てた二次埋葬ボグワで完結するのであるが、さらに4年後の2010年4月に洗骨を済ませた夫婦の遺骨がイフガオ織のブランケットに包まれた姿で対面することになった。植民して現地の人間となった子孫がイフガオの葬送概念に従っている理由は問うまい。この際に夫婦の長女と末妹、氏の実弟とも知り合いになった¹⁷⁾。

水牛を2頭も屠るのはイフガオでも珍しく豪勢で、水牛肉を会席者に分配する。筆者も何がしかの金銭を包んだが、調査地に戻る為、荷物が面倒で手ぶらで帰った。しかしながら皮肉なことに数日後、知人の家に泊まりにいった際、その家人に会葬に出席した者がいて、結局水牛肉をいただく羽目になった。2頭目の3歳程の若い水牛であったためか、肉質が柔らかく思いがけず旨かった。というのもイフガオでは水牛の立派な角を家に飾るのを名誉とし20歳くらいの水牛を好むから、当然肉質は悪く美味しいといえるような代物ではなく、そのような肉ばかりを口にしていたからである。

重要な違いは、まずアメリカ人の血を引きながら、正式な婚姻から生まれたわけではない父親とその子ベンジャミンがイフガオとして生きた事実である。ただベンジャミン本人はその境遇からか、イフガオの慣習にも批判的で、治病儀礼で本人が意識もなく判断もできないのに、身内の者が豚や稲を借り負債を抱え込むのは非合理的だ、と筆者によく述べていた。この意見は当時のイフガオの知識人に一般的だった。その彼が自分の二次埋葬での豪勢な動物供犠を知ったら、どのように述べたのだろうか。政治家としてなかなか手の届かない国会議員の席を、法律で定められた限界までの3期も務めたから当然だと考えたのだろうか。

1986年に戻ると、カップルマン氏の失意の日々とは別に、8月新たに任官した者たちは希望にあふれていた。アメリカ時代の統治形式でルソン島中央山地全体を1つにまとめた旧山岳州から、他の州とともにイフガオ州が分離された1966年の翌年、マルコス大統領に任命された知事で、その後、選挙で勝利した州知事に対する暗殺未遂事件については概略

17) これは2010年度、関西大学在外研究制度を利用した半年間の調査期間中、最初の1箇月をイフガオでの調査にあてた。それはイフガオ州フンドゥアン郡の運動会の観察調査が目的であった。調査というのは誠に偶然に依拠するところが大きい産物であるが、返す返す思うのは、このような機会がなければ、義理のある友人との交誼を結ぶことはかなわない。

したことがある¹⁸⁾。最初はバナウエホテルの利害もかかわっていると考えられるが、当時の州知事ルマウイグ氏の実弟が下院の議席を得た。その選挙で対立候補者がバナウエ町長のアリピオ・モンディギン氏の長子で、初の下院議員選挙で結果的に敗れた。その翌年1970年7月23日の夜に知事暗殺未遂事件が起きた。父のモンディギン町長が事件の首謀者として逮捕され、逮捕時に秘書だった男が銃器を取ろうとして警察隊にその場で射殺されている。

本人によると、旧スペイン人街のなかにある観光名所のサンティアゴ要塞に5年間投獄され、そのなかには故ベニグノ・アキノ氏もいた。モンディギン氏は人権派の弁護士として知られたジョクノ氏の活躍で有罪は免れたという。

この事件が起きたのは、ハパオから谷伝いに距離が短いアムガナッドでの襲撃だったという。誰が実際に銃撃したのかは様々に噂されていたが、その後一本化している。そのなかで無視できないのが同氏の財務官だった者で、後にフンドゥアン郡の郡長となったD氏である。これは州知事に愛人を奪われたからという噂で、真偽は不明である。これは州知事が大腿を撃たれた事実を面白おかしく伝える噂だろう。

この時に一体、誰の紹介であったのかは思い出せないのであるが、既に初老の域に達していたモンディギン氏が返り咲いて、バナウエの隣にあるフンドゥアン郡の長に任命され、その就任パーティに出席したのが、現在も続くハパオ村との最初の出会である。

その就任式はフンドゥアンの旧郡庁前（字バコンで、現在はクリニック）で行われ、そのパーティには牛6頭が屠殺され出席者に振る舞われる前代未聞の規模で、それほど地元の高い期待に応えようとしたのだろう。豚の屠殺とは異なり周囲に牛の血の匂いが充満した。その当時のフンドゥアンはバナウエ役場前とは格段の差があり、規模はともかく鄙びたパーティだったという観は否めない。音響設備も貧弱でマイク音声も一般聴衆の耳に届いたのだろうか。しかも演説なども英語は常套句ばかりで、イフガオ語とともにタガログ語やイロカノ語が混じり分かりにくい。殆ど地元の政治家の名前を読み上げ、名誉を口ばかりで讃える儀礼的な意味しか認められなかった。

この就任式に8か村から村長が臨席していて、そのうちアバタン村の女性村長と顔見知りになった。その後、バナウエ以外に調査地を求めて、なんとか奥地に入り込めないかと考えていた筆者はその旨を申し出たが、この村は山下将軍がナプラワン山から投稿して身柄を拘束された地であり、貧しい村人は今も山下財宝探しに夢中であるから、日本人であ

18) 熊野、1990年、42頁。

れば身の安全は保証できないときっぱりと断られた。

確かにハパオからまだ小型乗り合いバスに乗り継がねばならず、その数も少なく乗車しても数時間かかるのだから緊急の事態に備えられないと判断し、アバタン村での調査は諦めた。それはバナウェとハパオを結ぶ村道は穴だらけで17kmの道程をジープニーで3時間以上かかったからである。これは10数年後、後悔の種になる。というのもその村には女性の祭司が存在し、90年代の終わり頃やっと情報をつかんだ時には亡くなっていたからである。

ハパオ村は元々バナウェ郡に属したが、この暗殺未遂事件後にフンドゥアン郡に編入された。現在の州都ラガウェからやや奥まったキーアングンに、1900年代に役場を建てたが、イフガオ州北部の山深い土地や旧山岳州の州都のあるボントクにいたる途中の町にも、アメリカ人の行政官はバナウェに拠点をおいたから、ハパオはバナウェとの結びつきを強めたかったのだろう。言語的にはバナウェはアーヤガン方言で、ハパオはトゥワリ方言と分かれているが、ハパオ村からバナウェに向かう2か村がアーヤガン方言だし、ハパオ村はその2か村ともに関係が深かったからという事情もあったのだろう。

A. モンディギン氏はハパオ小学校の教師をしている姪の家に寝泊まりし、フンドゥアンにある郡役場とバナウェ間を往復した。同氏は幼少時、ハパオから16km離れたバナウェ小学校に毎日通い、卒業後の第二次世界大戦前に、戦争中は米軍ゲリラの兵士となった。おそらくセルバンテスの町に拠点があったはずで、本人に質したわけではないが元ゲリラ兵士からの情報に基づいている。

戦後、モンディギン氏はバギオで土産物用のイフガオの木彫工芸品で財をなし、1960年代には既にバギオ市を代表する実業家と商工会議所から最初に表彰され、その当時タイのプミボン殿下が即位前にフィリピン訪問した際に、面会したのが自慢の種であった。実際に面会時の写真を見せてもらったことがある。

最盛期にはアリピオ・パイオニア美術展と銘打ちバギオ市郊外のケノンロード、キャンプ7に会社と工場を、またマニラの金融街を構成し高級住宅地として知られるマカティの商業センターにも支店を出し、さらにマニラ市観光街に近いマラーテ地区に住宅を構えた。

イフガオの織物についてもかつて論文にまとめたことがある¹⁹⁾。カトリックの文書でも教会が中心になって女性の殖産の意味で、1970年代にイフガオで始まったことになっているが、モンディギン氏の場合はバギオに移住したイフガオの人々を組織化し産業化に成功し

19) 熊野、2004年



写真 I ビジネスマンの頃の A. モンディギン氏

たと言えるのだろう。またこうした工芸品の土産物ビジネスは成功者を輩出している。先ほど紹介した W. ベイヤーの記事が載っているカタログには、イフガオ美術を扱う店舗が 3 軒ほど広告を出しているが、アリピオの店は見当たらない。

政治家と観光の関わりを知りたくて、もう一度インタビューに応じていただいた経緯もあって、バナウェでの観光についての調査を途中で放棄し、新たに調査地をハパオに求めようとしたのは、南部はアメリカ人の研究者バートンが良く記録をしており、東部のアーヤンガン方言地域は 2 か村、コンクリン博士が調査している上に、さらに東部にあるマヨヤオは 1907 年から布教目的で活動したベルギー人神父の中にも、後年、人類学的な記述研究を行った F. ラムブレヒトがいたから、残された地域をフンドゥアン郡に求め、モンディギン氏の協力を仰いだ。また同時期に日本人研究者の合田濤先生が、先に述べたドクリガンでの調査を開始していた事情も重なる。

ところでモンディギン氏の妻はイロコス出身でイフガオ語が話せないからなのか、寡黙で誰とも会話せず、息子たち 2 人ともその後バギオで知り合うことになった。アキノ政権時代、軍部クーデタ事件が 3 度起き、その首謀者とされたホナサン大佐に繋がりがあると密告され、任期 1 年目で再びフンドゥアン郡長の職を追われている。

1994 年に調査を再開しだした筆者に、バナウェ小学校下の坂を下って教会を越えた道路沿いの家に妻と同居するモンディギン氏とも再会したが、既に脳卒中に倒れ半身不随で歩行にも難渋し、元々訥弁ではあったが、言葉もやっと聞き取れるほどの氏の姿が痛々しかった。しかしながら夫人の方はやっと夫婦水入らずの平穏な生活を取り戻した安堵からか、落ち着いた雰囲気醸し出してもいた。1995 年に再び調査地を訪れた際に、同氏が亡くな

ったことを知らされた。

モンディギン氏について同世代の者たちと話をすると、決まって古きよき時代を思いだしてか涙ぐむこともあったが、最近、親しいインフォーマントで元ゲリラ兵士の体験も共有する者が、財産を失って動物のように山中を逃げ惑ったと同氏の事をあげつらうので、新たな異説が表れたとも考えられる。ともかくイフガオの木彫品は写実的で、それを観光土産に特化し産業化したという点で大きな功績があるとはいえ、アリピオも文化の商品化という点でイフガオの文化的資源を売り物にした、ブローカーと呼べるだろう。

第3章 同時代のハパオとフンドゥアン郡における調査の背景

まだ当時フンドゥアン郡は共産ゲリラの新人民軍が制圧していて、警察がない地域であった。それは例の暗殺未遂事件でバナウエから行政的に切り離され、村の大学帰りの若者に同調者がいたからである。またアキノ政権のもと故ベニグノ・アキノ氏の衣鉢を継ぐかたちで、イフガオを含む北部ルソンの山地の自治と西ミンダナオのイスラム教徒の自治を認めようとしたため、新人民軍との休戦協定の交渉が進められ、山から降りてくる新人民軍兵士の部隊に出くわすことも何度かあった。この交渉が最終的に破綻したのを見届けるような形で、1987年の調査を一時的に中断した。

イフガオはかつての首狩りを除けば、重大な犯罪がきわめて少ない社会で、これはアメリカ時代の研究からもよく知られた事実であり、警察は不要な社会である。簡単な留置所を備えた警察署は最近では増えているが、いつも空でたまに酔っぱらいの大トラが入られるに過ぎない。

ハパオ村民にとってゲリラ兵士は借りた鍋釜をこわす厄介者だが、最も恐れたのは官憲の急襲に巻き込まれることだった。幸い筆者の滞在中には襲撃はなかった。ただ現地女性のなかにはゲリラ兵士と恋仲になる者も現れ、子供を産んだ女も何名か知っている。ゲリラ兵の夫とともに従軍した女もいる。友人のなかにも元ゲリラで投降した経験を持つ者もいる。

特にハパオ村の辺境部にある山はゲリラ新兵の訓練地域であり、特に公道から川一つ隔てたバアンは官憲が急襲した際に逃亡をはかる地域でもあった。ハパオ村とバアンとの行き帰り、毎日のように隊長と出会い互いに顔は見知っていたが、双方ともに言葉をかける理由もなかった。筆者の滞在目的を確認したいのか、イフガオ出身のゲリラ兵士2名が夜間に訪れ、言葉を交わしたのが例外的な接触だった。

マニラとバナウエ間をバスで往来するとき、数度ゲリラ兵士の志願者が同乗しており、

一様に野球帽やバンドナで顔を隠していた。誰とも話をせず異様な集団に目を向ける乗客もなかった。また低地の町では目につかないのだろうが、バナウエからハバオの間には、定期的にゲリラ兵士のためと覚しき米袋が定期的におかれている家屋もあった。

午前3時に起きだしてジープニー捕まえ、早朝にバナウエを発つバスに乗って、マニラに戻る時に別の悩みの種は、大麻吸引目的の欧米系の観光客だった。しばしばバナウエからラガウエにいたる検問所で警察隊が荷物をチェックして取り締まった。自動車などが速度を落とすように、検問所の数十メートル前に2本の大木を横たえて大きくカーブを切らないと通行できなくするか、または道路にマウンドを拵えて、急速では乗り越えるのに無理があるようにする。マウンドの方は何も山地だけが例ではなく、マニラのショッピングセンターの玄関口などでも見かける。また2010年にスペインを初めて訪れた際にも、同様のマウンドを見たことがある。大木を横たえるのは、中南米を扱った映画ででていたのではないかと記憶している。

検問の度に持ち主不明の荷物が必ず網棚にあり、大麻があったのかどうかは分からないが没収されるのが常だった。これもバナウエから山深いボントクにいたる道路があり、当時ボントクやその隣町サガダには、大麻目的で訪比する欧米人の観光名所となっていたからである。

バナウエでもそのような密売人がいたのも確かで、ジミー宅で身内の女性が結婚後、訪問に来て簡単なパーティを開いた時に、行商で若い男が2人連れて大麻を売りつけようとした。またイフガオでも貧しい村ではトウモロコシ混じって大麻を栽培している畑もあり、実際に乾燥小屋を見学したことがある。

当初、宿泊先のモンディギン氏の姪と言っても筆者より年上で厳格な教師であり、夫と一人息子に去られて一人暮らしだった。フィリピンの僻地などでは、このような所帯に旅人を寝泊まりさせるのが習慣らしい。この教師宅には以降も必ず立ち寄り、そのまま泊めてもらうことが多かった。時に僻村から女子小学生を預かり学校に通わせたが、その躰が厳しくて居付かなかった。他人に命令することなど稀なイフガオの文化と近代教育との対立を、目にしたことになる。

また調査の初期には、彼女の同僚で女性の教員がブーランという字に建てたロッジに泊まった。客はなかったが、下宿用の部屋だったのかもしれない。虫刺されに本格的に悩まされるのはこの頃からで、昼には放し飼いの犬猫からのノミをもらい、夜間にはヤブ蚊ばかりでなく、天井から落ちてくる小さなアリも悩みの種だった。また森に近い家に泊まる時には、ブヨに注意しなければならなかった。

ハパオ村でも川向こうのバアン地区に居を定め調査を開始したのだが、思いのほか伝統的祭司のモンバキが存在し、活発に儀礼活動を行っていた。老人たちに敬意を表すため市販のジンを用意し、客人の為に缶詰などを大量に備えもした。第一義的には筆者個人の栄養状態を維持する為であった。

最初に公道に近いハパオ村ブーラナンの女性教師の下宿屋に泊まったのは、信頼の厚い祭司がいたからである。最初のインタビュー中に対岸の村から病気直しの儀礼に来てくれと請われ、筆者も同行した。11月から12月は雨期のなかでも夜間に雨が降る季節で、夜半に松明を灯して対岸に向かったが、畦道はせまくしかも田植えに向けて田を整備し、余った泥土を畦に盛りつける。滑る上に畦道の下が棚田ならば良いが、崖になる箇所も多く5、6メートルの高さというのは当たり前で、10メートルを越える崖もあり、その下はハパオ川の激流が大岩を打っていた。足を踏み外し転落しても怪我で済めば良しとしなければならぬ。

そう思っただけでも足が竦みがちなのに、ハパオ川も今のように立派な橋が架かっているわけではなく、丸太の上を渡った時には途中で完全に足が竦んでしまった。ようやく渡り終え、短い儀礼につきあって日本風に言うのなら丑三つ時に帰宅の途につき、這々の態でモンバキの家に戻った時の安堵した気持ちは今でも忘れられない。この光景は以後も、何度か繰り返される。実際に先に述べたロサルドウの妻ミシェルは、1981年、イフガオ州キーアングン郡で夕刻に移動中、橋を渡りかけて足を滑らし、谷川で亡くなっている²⁰⁾。

また調査助手を選ぶのにブーラナン出身の若者と、モンディギン氏の姪から紹介された候補者が挙げられ、二人と話を交わしたが、やはり公道から遠く離れた地区の方が都合良いと思い、積極的に会話したバアン出身の若い男を選んだ。この者とは現在でも連絡をとりあっている。

ハパオの公道からバアンにいたるには高低差で200メートル下がり、ハパオ川を渡って再び同様に300メートル程登らなければならない。およそ40分で歩いたが、バアン側の大半が用水路の側溝に石を敷き詰めた道で、多くがぐらつく浮き石状態で、石壁を登りもしたし決して歩きよい道とはとても言えなかった。

バアンでは最初、茅葺き屋根の家屋を借りてご機嫌だったが、この気持ちもすぐに弊えた。元は稲倉で娘宿として数人の少女が寝泊まりしていた家で、彼女たちには立ち退いてもらった。ところが泊まった最初の夜から、床板の隙間からぞろぞろと南京虫が這い出し、

20) Rosaldo, R. 1989. p.9 (1998年、19頁)

筆者の背中も南京虫の運動場となってしまう眠るどころではなかった。大きなのは女性の親指の爪ほどある。すぐに殺虫剤を板の隙間にくまなく噴入すると、瞬間に南京虫が姿を現した。

当時、電気が通じていなかった上にランプを常用する家も少なく、筆者の借りた家に夜になると皆が集まり、フィリピン産のジンや飲み物、タバコを振る舞い歓談した。隣家には老モンバキのクウェと妻のクリップリプで子供とは早く死に別れていた。その隣にはクウェの弟で元警官のマルコス・アバゲが年若の妻と長男と住んでいた。ある意味でイフガオの社会は大人であれば夫婦を形成し、高齢の者でも再婚する可能性が高いと言える。相当な老女であれば、さすがに一人暮らしの者が増える。少し離れた3軒目には、口数の少ない柔らかな初老のムンリティンを家長とする一家で、彼は元合衆国ゲリラだった。こちらは子供らとの同居で、4軒が肩を寄せあうように暮らしていた。

元警官マルコスの妻は頭脳が明晰だったというが、怠惰で有名で夫の年金が目当てで結婚したという噂だった。また息子が学齢をとうに越えているのに、学校にも通わせなかった。今で言う育児放棄にあたる。この子も90年代に両親が亡くなると行方をくらました。元ゲリラ兵士の家族には病弱の娘がいて、相当な物持ちでなければ開催できないような治病儀礼を数回、催したことで知られたが、この娘は亡くなっていた。これも合衆国からの年金が経済的な余裕を生んだのかもしれない。

ただ住み始めて1か月もすると、元合衆国ゲリラ兵士の家にバギオから長男の狂人が帰郷するとの噂が流れ始め、次の朝に帰ってくるのが確実にになった夜に、村人総出で助けてくれ一夜のうちに宿替えした。それは夜に集まってくる常客のなかに、子供を亡くしたばかりの男で自分たちは別の家に住み、使っていない家を借りることになった。これも身内に不幸があった際の対処のしかたの一つである。こちらの家は欧米式を意識しているため、快適に暮らすことができた。

ただ1月後半から2月半ばにかけては田植えの準備にかかるが、昼間に小雨が降りやまず夜は晴れ上がる季節で、大地は暖まる間もなく冷えきり最も寒い季節でもある。あまりの寒さに真夜中に眠れず、ジンを湯割りにして寒さを凌いだし、現地の人間同様に、床板にビニールごごを直接敷いて綿のブランケットで寝ていたが寒く、毛布を使ってもさほど変わらないため、ベッドフォームを取り寄せた。

学校やミサに行く前に冷水を浴びるのは、イフガオでもフィリピン人と変わらない。イフガオでは乾期が始まる3月中旬からは気温が上がるが、山からの湧き水は常に冷たい。時折、日光が射した時に日光浴をした後、水浴びするか、川に行って体を洗ったりもした。

唯一の楽しみは歩いて半時間程のところにボギヤと呼ばれる河原が硫黄ガスを出し、その熱を利用して河原の一角を石垣で固めて温泉とした。現地の若者たちがよく利用していた。とは言っても川は激流で、石垣はすぐにくずれ土砂が入り込むので、それらを整えてからの入浴だから手間がかかる。それでも寒さが厳しい時期には有難く、週に2度は入りに行った。10数メートルもある石壁の僅かな足がかりだけをたよりに降りて行き、苔むした岩がごろごろしている激流を渡河して、やっと得られるご褒美であった。

缶詰を大量に準備したとは言え、数週間毎にバナウェに出て買いそろえた。それだけでは十分ではなく、現地では米は現金で分けてもらいイモや野菜類も交換して手に入れた。やはり新人民軍ゲリラの影響で、山の狭間という意味のホボンと呼ぶマーケットは貧弱そのものだし、日曜日にカトリックのミサの終わり頃には人が集まるのを見込んで、野菜の行商が出る程度だった。ハパオでは缶詰が品切れがちで値段も高がついたから、種類も量も豊富で安いバナウェ町の店を頼りにした。

イフガオは食品の保存という観念が薄い社会で、調味料と言えば塩のみと言ってよく、味に変化を望む者は庭に植えた唐辛子の実を使う程度であり、醤油を使う家は稀だった。単純な料理法で、料理と言えば水炊きを意味する。その頃には植物性の油脂が市販され、ハパオ村民も水田にアフリカ原産のティラピアや泥鰌を養殖し、揚げて食べるのも流行し始めていたが、プロパンガスとコンロが必要で贅沢品だった。ただ新鮮な素材を時間をおかずに食べるという習慣は変わらず、養殖魚も十分に泥を吐かせる時間がなく調理するから、魚を食べているのか果たして泥を食べているのかは分からない。ミネラルをとっていると腹をくくるしかなかった。他にも田螺にちかい貝は、水煮だったが、これはさほど泥はなかった。

また衛生事情は、フンドゥアンに限ったことかもしれないが、昔のままで酷く豚や犬を放し飼いにし、便所を備える家はなくて人間様も適当な場所で済ませ、その人糞は豚が先ず処理、つまり食らってしまい、犬がさらに2次的に処理をする。したがってバナウェの土曜市のように一時的にせよ、動物の糞を目にすることはまれであった。村人は大用の後に木の葉を用いたので、ティッシュを使う筆者などはどこで用便したかが分かり、恥ずかしい思いをしたものだが、いつの間にかなくなっていたのは腹をすかせた豚か犬のおかげだろう。

缶詰を多食したからか筆者の糞便は犬や豚の格好の標的で、屈んだ途端に豚の頭が草むらから突き出たのも何度かあり、常に石ころを幾つか手にして用を足さなければならなかった。モンディギン氏の姪宅に泊まる時にも、冷えて小用するだけならともかく、大用に

は家から20メートル近く離れた谷川に丸太を2本差しかけ、少し小屋掛け風にしたトイレに行かねばならず、トイレトペーパーを片手にもう一方の手で懐中電灯を照らす大仕事だった。すぐに嗅ぎつけたどこかの犬が何頭か、谷川の下に姿を現すのは常だった。とは言っても、雨上がりの後など野生の蘭がどこかにあるのだろう森中が芳香に満ちて、その香気は熱帯ならではの、生活上の喜びでもあった。

もちろんトイレがついた家では低地流に水で手洗いする。トイレトペーパーも含め、これらの方法がどこまで衛生的かは議論の余地がある。ただフィリピンでは左右で不浄をわけるようなヒンドゥー的な文化はなく、心理的な忌避感はなく両方の手をつかっている可能性が高い。

この時期には種々の治病儀礼や生誕儀礼を幾つか、農耕儀礼について参与観察を重ねた。また田植の儀礼で、伝統にもとづき最高位の祭司が勤めるのを見たのも、1987年が最後になった。調査とは言うものの、先に述べたようにバナウェの言葉とハパオとは全く発音等が異なり、当初、現地語はほとんど使えなかった。それと屠殺したばかりの鶏ならまだしも、狩猟社会のほとんどがそうなのだが、豚は毛を焼き残った毛は山刀でこそぎ落としただけで皮付きである。黒こげの毛がついた東坡肉を思い浮かべ、これを水炊きしただけと言えれば理解可能だろう。毛の焼いた香気が独特の風味がある。この調理法はルソン島でも山地民に共通した文化であり、低地とは異なる。ただ山地か低地に関係なく、脂肪をご馳走とするのは共通の文化でもある。

別の論文で述べたが、助手を伴ってマニラに降りた際に、東坡肉を喜ぶだろうと思い食べさせたところ、一口で調味料が多くて、味が複雑すぎると言って食わず、結局、筆者が殆どを食べた。また筆者用にとった刺身も試してみさせたが、怖々口に運びながら実際に口にすると、こちらは醤油と山葵だけなので、こちらの方が単純で口に合うという始末だった。

このようにイフガオの食をめぐる文化を体系的に捉えることもできず、適応するのにも困難だったことは正直に述べておきたい。取れたばかりの米も野菜も肉類を直ちに煮て食べるという単純な料理の体系であり、それだけを考えると日本の食文化に変わらないという気持ちが出て、考え方が変わったのはおおよそ1年後のことである。

2月の田植え開始の大規模儀礼を観察調査して、約1か月後、膨大な資料を抱えたまま調査は一度、中断することになる。

まとめにかえて

調査とは言っても、文献からの知識ばかりで当該社会を知らないのも同然であった事實は、現地に入ると悔しいまでに何度も思い知らされることになる。別の論文で何回か述べたように、死者の名前を口にすることは重要な禁忌であり、それを知らない筆者はバイヤー博士が残したイフガオの、ある系図の印象があまりにも強く、バアンではその禁忌を犯してしまった。それはバイヤー博士がイフガオ女性と結婚しその親族に入り込んでしまったから許されることで、当時の筆者とは関係構築の質が異なるのを正しく認識できなかったためである。

そのときの助手の態度は筆者に直接抗弁するのではなく、横に姿をくらませてしまうのだった。何人かに聞いた挙げ句、逡巡する村人の姿に初めて奇妙だと気がついて、助手に問いただして禁忌の内容を知ることができた。

他にも人を使うという経験もなかった平均的な（と信じる）日本の研究者に、助手と過ごした毎日は新たな経験の連続でもあった。

人類学においてフィールドワークの重要性を強調しても、単身で調査地に乗り込む日本人の流儀にも限りがある。筆者の場合、自分では調査をしていたと良い気になっていたが、実は財宝探しの嫌疑が筆者にたいして晴れていたのではなく、筆者の行動を郡長に報告していたというのは、助手から後になって聞かされた。その事実を語ってくれた時、この助手が筆者の最初の理解者と信頼している。一人対多数という調査地の人間関係は限定的であるというのは、何度繰り返しても足りないだろう。

当該文化に適應すると口では言っても、大方は何かで身を守らないかぎり生活するのもやっつである。ジェニスタの残したアメリカ人の為政者たちは、イフガオの生活様式に合わせることなく、自分たちの生活様式を固守したのはヘスター氏についての記述でも分かるだろう。それはバイヤー博士でもコンクリン博士でも変わらないのではないだろうか。

ここではそのような問題点の背後と、何人かのイフガオの血を引く人々の類型は、2つの文化に挟まれたジミーとベンジャミンがアメリカ人には戻らず、あるいは拒否され、おそらくイフガオとして生きたこと、そして純然としたイフガオでありながら、山地民の近代化の先駆けとなり、フィリピン低地や外部に富や名声を求めながら、最終的には故郷の土地や権勢を振るった町で死を迎えたアリピオの3人を中心に描写してきた。

そして遅れて政治家となったジミーについては疑問もあるが、残りの二人はまさしくイフガオ的で、「見てれば、そのうち分かる」というようなイフガオの人々にありがちな態度

が強く印象に残っている。この沈黙するという文化的な態度は、旧弊な不言実行型の日本人にも共通する部分があり、何かしら稲作農耕民の特徴ではないかと考えながら、実証にはいたっていない。

最後に調査地を選ぶというのは政治情勢などに左右され、混乱期に実際には難しく、筆者のように新人民軍ゲリラの跋扈する土地を選んだことは、賢明の策であったのだろうか、今も自問している。所属した研究所に報告書を作成する気にさえなれず、これまでそのまま捨て置いてきたが、このような形で筆者の思いの一部を書き記したことになる。似ても似つかないかもしれないが、ラビノウ流のフィールドワーク論とまでは行かなくとも、イフガオ流『気違い部落周游紀行』と捉えていただけるのなら幸いである。

参考文献

- Barton, R. F.
1920 "Ifugao Economics." University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 15. 5: 385-446. Berkley.
1930 The Half-way Sun; Life among the headhunters of the Philippines. Brewer and Warren, New York.
1938 Philippine Pagans: Autobiographies of three Ifugaos. George Routledge and Sons, London.
- Beyer, William G.
出版年不詳 'Ifugao Art' in "The Manila Oriental Antiques: Exhibition & Auction I." pp.50-59. Manila.
Congregation of the Immaculate Heart of Mary (CICM)
1982 NOVA et Verera. CICM provincial newsletter, vol. XVII, No. 4. Manila, Philippines.
- Conklin, Harold C.
1968 Ifugao Bibliography. Bibliography Series No.11. Southeast Asia Studies, Yale University.
1980 Ethnographic Atlas of the Ifugao, Yale University.
- Conklin, Jean M.
2003 An Ifugao Notebook. Authorhouse.
- Dumia, Mariano A.
1979 "The Ifugao World." New Day Publishers, Quezon City.
- 石引ミチ
1979年 『従軍看護婦：戦争と人間の記録：日赤救護班比島敗走記』 徳間書房
- Jenista, Frank L.
1987 "The White Apos: American Governors on the Cordillera Central." New Day Publishers, Quezon City.
- きだみのる
1981年 『気違い部落周游紀行』 富山房
- 熊野 建
1990年 「現代イフガオの文化人類学的考察」大阪短期大学紀要第3号、35-42頁
2004年 「フィリピン・イフガオ族と衣装の文化：ピーニャとイカットの周辺」鈴木/山本編著『装いの

人類学』103-126頁、人文書院

2011年 「何故自らのスポーツをエスニックゲームと呼ぶのか：イフガオ民族スポーツの事例から」アジ
アスポーツ人類学、第2号、平成23年12月（未完）

ルイス、O.

1970-71年 『ラ・ビーダ；プエルト・リコの一家族の物語』第1-3巻（行方昭夫・上島建吉訳）、みす
ず書房

2003年 『貧困の文化；メキシコの<5つの家族>』（高山智勝・染谷臣道・宮本勝訳）、ちくま学芸文庫
ラビノー、P.

1980年 『異文化の理解：モロッコのフィールドワークから』（井上順孝訳）岩波現代選書

Rosaldo, Renato.

1989 Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis. Beacon Press, Boston. (1998年『文化と真
実：社会分析の再構築』椎名美智訳、日本エディタースクール出版部)

—2013.7.3受稿—